ゆうことみゆきの
なるほど
アイヌ文化エッセイ

ソンコ de ソンコ

Vol.153

アイヌ文化のことをもっともっと話したい!
本田優子と村木美幸の二人が、その魅力を交代で
執筆するソンコ(=お便り)形式のエッセイです。

今月のテーマ

ウパシ(雪)

本田優子(札幌大学教授)

雪はアイヌ語ではウパシ。例年雪が降ると、友人の歌声が脳裏に響き渡ります。♬ウパシアシ エエク カ ソモ キ〜(雪が降る〜あなたは来ない〜)♬。白い冬の訪れです。

ウパシの付くアイヌ語はたくさんあり、たとえば雪が降る前に現れる白い妖精のような雪虫は、ウパシキキリ(雪・虫)。日本語とまったく同じ意味です。もっとも日本語の正式名称はトドノネオオワタムシ。う〜ん、ウパシキキリの方がぴったりのネーミングですね。それから、まん丸もふもふ、大ブレイク中の小鳥と言えばシマエナガさん。アイヌ語名はウパシチリ。チリ=鳥なので、雪鳥。日本語名よりずっとかわいい。

物語には、強い霊力を持つ「ウパシチロンヌプ」が登場します。チロンヌプはキツネを意味しますが、ウパシチロンヌプは一般的にはエゾイタチ=オコジョのことだとされます。冬になると、毛が真っ白になる小さくてかわいい動物ですが、とにかく霊力が強いと言われ、ある時は術を使って精神の悪い蜘蛛の女神をこらしめる男神として描かれるかと思えば、ある時は文化英雄アイヌラックルと恋に落ちる女神。飢饉(ききん)になったら礼節を失った人間たちを諫(いさ)め、鹿の神・魚の神に謝罪し、間を取りなしてくれるなど、八面六臂(はちめんろっぴ)の大活躍。現実のアイヌ社会でも「それ以上霊力の強い神はいないものだ」とすら言われ、イナウキケ(木幣(もくへい)の削りかけ)を飾り付けて包んだ小さな頭骨は秘宝として崇められました。あの小動物のいったいどこにそんな霊力を感じるのか不思議ですが、大きなウサギをも襲って食べるという、見た目からは想像もできないような獰猛(どうもう)さを秘めているからかもしれませんね。

イラスト/山丸ケニ

雪が降ると、いよいよ冬猟の季節。かつての男たちは弓矢を携え、森を歩き回りました。斜面ではクワエチャラセ(杖で滑る)。山杖一本でバランスを取り、かんじきで雪煙を立てて滑降する姿が一九六〇年代の映像に残っていますが、本当にカッコいい。

一方で、冬は道具づくりの季節でもあります。たとえば、弓の弦や荷縄用に採取したツルウメモドキの繊維は、最初は青いのですが、数分茹でてから雪の上で晒すと真っ白になります。この雪ざらしは、雪が溶ける際に発生するオゾンを利用した繊維の漂白法で、アイヌに限らず雪国では広くおこなわれてきました。雪は人々の生活に豊かな恵みをもたらします。Ⓙ

次回のテーマは「漆器」
村木美幸(アイヌ民族文化財団副理事長)が
担当します。

ウポポイ
NATIONAL AINU MUSEUM and PARK
民族共生象徴空間
JR白老駅から徒歩約10分

ウポポイPRキャラクター
「トゥレッポん」

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学教授。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団副理事長。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■山丸ケニ(やまるけに):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団職員。ウポポイでアイヌ語体験プログラムを担当する。

イランカラプテ
「こんにちは」からはじめよう。